

北アメリカの華僑・華人研究 ——アジア系の歴史の創出とその模索——

園 田 節 子*

The Development and Social Background of Overseas Chinese Studies in North America: Striving to Establish a History of Asian Immigrants

SONODA Setsuko*

The field of Overseas Chinese studies is inextricably linked with the historical and social context of the nation-state in which the field was established. In discussing the development of historical studies of the Chinese in North America in the second half of the 20th century, this paper examines how Overseas Chinese studies was established as a specific research field and reveals the field's characteristics which are tied with the American context as a whole. From the early 1960s, Chinese immigrant intellectuals in the Canadian and American West Coast authored histories of the overseas Chinese in Chinese. These studies relied on the historical materials of Chinese immigrants and on Chinese secondary sources published under the Overseas Chinese policy of the Taiwanese KMT. From the 1970s, as part of the Asian-American movement, second generation and immigrant middle-class Chinese intellectuals established the new framework of Asian-American studies. This field proposed a scholarship which legitimated the historical experience and presence of the Asian in American society and was thus premised on Asians as American citizens. The most recent scholarship on the overseas Chinese has introduced the concept of transnationalism, which is premised on mobility, and several empirical historical studies have been produced in this field to overcome the nation-state paradigm.

Keywords: Transnationalism, History of Overseas Chinese studies in North America, Asian-American studies, Chinese Exclusion Act 1882–1943

キーワード: トランスナショナリズム, 北アメリカ華僑・華人研究史, アジア系アメリカ人研究, 中国人入国制限法 (1882–1943)

* 財団法人トヨタ財団; The Toyota Foundation, 37F Shinjuku-Mitsui Building, 2-1-1 Nishi-shinjuku, Shinjuku-ku, Tokyo 163-0437, Japan
e-mail: setsukosonoda@hotmail.com

序

アメリカ合衆国とカナダでいわゆる「華僑・華人研究」に該当するのは、Overseas Chinese, Chinese Immigrant, Chinese AmericanまたはChinese Canadianなど、中国人移民や中国系、そしてそれに関連する物事を対象とする研究一般である。研究蓄積はアジアの華僑・華人研究に勝るとも劣らない量だが、多地域からの多数の移民によって成立してきた北アメリカでの研究であるゆえに日本の華僑・華人研究とは異なっているし、約60年にわたる中国人排斥法のような独自の熾烈な経験があるゆえに、東南アジアのそれともまた異なっている。

フィールドとする地域や国家において、中国系の人々を研究対象とする特定の枠組みを意識するきっかけが、どういった現地社会の実情や国際政治環境のなかで生じたか、また、誰がそれを担ったか。このように研究成立時の歴史的社会的文脈に目配りすることは、華僑・華人研究の場合、次の二つの理由から特に求められるのではないだろうか。第一に、華僑・華人へのナラティブは、国家に対する、もしくは国家にとっての、ある人間集団や個のあり方の変容を常時反映している。海外の中国人を「華僑・華人」なる存在とする認識のしかたは、国境や国民など近代の国民国家概念の形成と、その概念に則った近代国家の整備・成立とともに19世紀末に出現したものである。そのため現地社会や現地政府、中国政府などの他者や華僑・華人自身が「華僑・華人」をどのように表現するかは、当時の居住国や中国の国内状況、これらの二国間関係、国際社会における関係、さらには中国系コミュニティでの力関係に左右される。言説が幾重にか存在するそのセッティングを、包括的に理解する必要がある。第二に、ひとつの研究テーマとして華僑・華人研究の設立を求めるような集団的ならびに社会的要請を反映するため、研究がはじまるその段階から、議論の方向性や帰着点がおのずと規定される傾向を認めない。例えば、移民の現地社会への同化のような、自明の理として前提にされがちないくつかの概念や法則があること、あるいは国境を踏み越える自由な存在としての華僑・華人像のような、理想化された人間像が投影されることなどが挙げられよう。

しかし、実際に研究の成立時を検討して華僑・華人研究の枠組みを相対化する作業の必要性については、これまで充分意識されてきていない。現在、華僑・華人研究の大部分は、テキストの分析理解を経てまとめられる事例研究であり、それがうずたかく積まれてゆく状態にある。本稿では、北アメリカの社会や地域性を反映した研究傾向をアメリカ現代史のなかで捉えなおして、研究そのものの相対化を試みる。北米に複数ある研究の中心や学派、刻々と変化する研究動向を網羅的に把握することが望ましいところだが、ここではアメリカとカナダの華僑・華人史研究に関わる新アプローチの成立・転換時点における特徴的な事例に焦点を当てることで相対化の重要性をより明確に提示したい。以下に、北アメリカの華僑・華人研究の最新動向を紹介し、それが乗り越えようとしたパラダイムと、そのパラダイムの背景にあった歴史と社会、

そしてそれと研究領域との関連を検討する。

I 北米の中国系研究の新動向——移動性への国民国家アプローチの限界

移動性を前提とした歴史をどのように描くか。いま北米の中国移民を研究する歴史学の領域では、越国家性、越国境性を持つ諸現象やその性質を研究するにあたって、「トランスナショナリズム」の概念が定着している。1990年代末から2000年初頭にかけて、博士学位請求論文執筆中の院生のあいだで華僑・華人を研究する新しい歴史学アプローチが試みられたが、トランスナショナリズムはその模索のなかで括目すべき成果を生み出した。

中国移民の歴史を考える際に、「ディアスポラ diaspora」「トランスナショナリズム transnationalism」「グローバリゼーション globalization」「脱領域国民国家 de-territorialized nation state」などの新しいことばに乗せて議論が展開されはじめたのは、1990年代半ばからである。そして1999年に、アダム・マッケオンはこの年に発表した論文で「ディアスポラ」を、北米中国移民の近代史のひとつの学知領域として確立するために、その概念化を試みた。マッケオンは、それまでの研究が中国か北アメリカかの二項対立した華僑・華人像に分かれる傾向が根強いというパラダイム——華僑・華人を、中国と自己同一化してその文化やアイデンティティを維持し続ける人々として本質論で捉えるか、あるいはアメリカ市民として社会へ同化適応する過程を必然視した結果、過去の一時点での過渡的現象として解釈するか、そのどちらかになる二大パラダイムの問題を取り上げて、これを克服するための概念化の必要性を論じた。つまり国民国家を軸に考えると、出身国と居住国を往来する家族生活や経済活動・国を越えて成立する組織・複数国家に根差して形成されるアイデンティティなど、近代に生じたヒトの国際移動に関わる現象は、国家や地域の周縁で生じた現象として断片的に扱われ等閑視されるので、ひとつの総体的な中国移民や中国系の人々の像を結ぶようなアプローチがとられなかった [McKeown 1999: 306–307]。マッケオンは、このように華僑・華人史研究上の問題を捉え、国民国家を基軸にする移民史のナラティヴやアプローチのもたらす限界を指摘した。

確かに、これまでの歴史学が国民国家を前提にしてきたことと、従来の研究のなかで華僑・華人テーマそのものが周縁化されてきたこととは、表裏一体と言えよう。そもそもフィリップ・キューンは比較的早い時期から、華僑・華人史を成立させるに当たって、華僑と中国本国との関係については、中国本国を実体として捉えつつ華僑・華人の本質やグレーター・チャイナ論とからめて議論するよりも、むしろ「参考基準点 Reference point」として諸現象の分析に用いるのが良い、と指摘している [Kuhn 1997: 3]。民族本質論にならず、出身国からの関与や影響を排除せず、それでいて二項対立的存在にならない新アプローチとして、マッケオンは1990年代末までに盛んに使われるようになった「ディアスポラ」が、感情や文化、歴史

によって地理的な隔たりを越えて結びつく人々の総体に広く使える包括的な語句になっているところに着目した。越境現象の概念を使うことで、国を基点にする歴史から省かれてきたグローバルな移動・移住のプロセスを中心に研究し、国民国家アプローチを克服できる、あるいは国民国家の視座を補充できる多くの議論の展開が可能になる。

さてこのように辿ってくると、マッケオンの議論の最大の特徴は、従来の研究アプローチのように華僑・華人という集団そのものを定義・叙述するのではなくむしろ、組織・アイデンティティ・ヒトの繋がりやヒトの流れなど、華僑・華人の移動性にかかわる現象に焦点を当てるよう繰り返すところにある、と言えるだろう [McKeown 1999: 307-308, 311-312]。マッケオンが試みた「ディアスポラ」の概念化は、特定の集団に焦点を当ててきた「華僑・華人研究」の前提にはない。ヒトの移動は、もともとある特定の時代の特定の条件と強く結びついているものなので、集団よりも現象をみることで、当時の国民国家の外側にも目を向けることができる。さらにマッケオンは、「ディアスポラ」概念を歴史学に用いる場合、時代性のなかで分析する視座が不可欠だと強く意識しており、これも特徴的である [ibid.: 1999: 310-311, 313-326]。近代史の華僑・華人の「ディアスポラ」では、苦力貿易や契約移民労働者の大量渡航、チェーンマイグレーションや密入国を誘引するネットワーク、20世紀初頭のナショナリズムに代表される本国への強い政治的関心、そしてエスニシティとしての中国系などが、ヨーロッパ型資本主義・植民地主義の世界的拡大と、国民国家と国境の時代であった1960年代以前の歴史的文脈のなかで理解されるべき「ディアスポラ」と言うことになる。

この論文発表後、数年のあいだに新概念を用いた実証研究の成果が相次いで出版され、南北アメリカ複数地域にまたがる研究や、複数地域の華人社会を扱う比較研究が充実した。そのなかでディアスポラはアイデンティティの議論で好んで使われ、歴史学に定着したのはむしろトランスナショナリズムであった。マデリン・シュは、イエール大学歴史学教授ジョナサン・スペンスの指導下で取り組んだ博士論文で、20世紀前半の中国系アメリカ人と広東省台山のトランスナショナリズムを取り上げ、これを僑刊を用いて実証した [Hsu 1996; 2000]。これがトランスナショナリズム研究で初の実証研究であって、カナダの中国移民史研究者の重鎮ウィックバーグはシュの博士論文が未公開の段階からいち早く注目し、中国移民のトランスナショナリズムを明らかにすることで、従来現代世界のそれに限定的に使われていた「グローバリゼーション」を1900年まで押し下げて証明した、と高く評価した [Wickberg [2000] 2002]。以降、多くの意欲的な若手研究者が博士論文研究の成果を出版しており、例えばヨン・チェンは、サンフランシスコ中華総会館を中心に、近代のサンフランシスコの中国人コミュニティの構造をとりあげた。これは従来のコミュニティ研究と異なりコミュニティと広東省との紐帯そのものを重要視し、その性格を「越太平洋社会 Trans-Pacific community」と特徴付けて分析した [Chen 2000]。また先述のマッケオンも、ペルー・シカゴ・ハワイの中国系移民コミ

ユニティの比較研究を発表した [McKeown 2001]。2006年4月に公刊の決定した、19世紀キューバ・ルイジアナ間の華人契約労働者の移動を研究したムーンホ・ジュンの博士論文も、この潮流に属している [Jung 2000]。

以上、越境性重視の史学構築という目的のもと、マッケオンが概念化をめざした「ディアスポラ」は、含意を同じくするトランスナショナリズム研究として実体化した。これまで「国」を前提にして華僑・華人を「移民 immigrants」の範疇で考えた結果、国外からの個人の身体の一方向移動ならびに生活拠点の定位化が大前提になってきたが、「移動者 migrants」としての姿に光が当たってからは、人間が生活スタイルや生活戦略を練る際に国や境界に対して抱く発想や実際の行動と近現代の領域国家が生み出す国境や境界とは、相互認識を重ねて強化・変容するという関係も見えるようになった。つまり、ヒトの移動現象を通して見ることができる可変的な国家と個人のあり方を、歴史学の中に取り込むことが可能になった。このように現在トランスナショナリズム研究は、国民国家アプローチが生み出す二つのパラダイムに規定されてきた従来の研究を押し広げているのである。

II 北アメリカの排華の歴史とチャイナタウン内部構造

トランスナショナリズム研究以前の北米の華僑・華人研究を規定してきた二つの国民国家パラダイムがどのように形成されたか、その誕生を考えるに当たって、まず、19世紀末から続いた北アメリカの中国人排斥の社会構造とその気風のなかで生きることの意味、そして華僑・華人史研究がそうした文化的社会的背景を受けてチャイナタウンの内部から生み出される、成立時の状態を問う必要がある。特にアメリカ合衆国では、次に確認するように、中国系住民は、法的には1943年まで排斥の対象であり、現地社会の側から社会同化を拒まれる厳しい環境に置かれた。

アメリカにおける中国人排斥の動きは、すでに1850年代からカリフォルニア州で上陸税や人頭税を課される、教育機関から締め出されるなどのかたちで局地的にあったが、南北戦争後の不況や大陸横断鉄道完成後の都市への労働者移動の影響で、1870年代には西海岸一帯を席卷する運動となった。1882年、アーサー大統領は、議会で可決された「中国人入国制限法」——いわゆる排華法を承認した。これがアメリカ連邦政府が、特定のグループの特定の社会階層を合法的に国から排除する、史上初の人種差別法を成立させた瞬間である。以後、中国系は帰化権を否定されて「帰化不能外国人」となり、労働者は熟練・非熟練を問わず10年間の入国禁止となった [Lai 2004: 20]。次いで制限対象は労働者から、政府関係者・教師・学生・旅行者・商人を除く中国人一般に拡大され、中国人のアメリカ再入国も禁止された（1888年スコット法）。さらに1892年ゲイリー法と1902年にそれぞれ、1882年「中国人入国制限法」の10

年延期措置をとり、最終的に1904年には、中国系移民に関するすべての法律の無期限延長に落ちついた。排華法の撤廃は、1943年にF. ルーズベルト大統領が連邦議会法に署名して、国内の中国系住民に帰化と市民権の取得を許してからであるから、排華法下での社会的排斥はじつに60年間続いたのである。また、カナダもアメリカと連動して、よく似た中国人排除の構造を作りあげた。ブリティッシュ・コロンビア州では、1880年代に同地の中国人の参政権と土地所有権、そして就業の権利が剥奪され、人頭税が課された。そして1923年の移民法で、中国人の移民を全面禁止した。北アメリカのこのような環境下、中国系住民に職や住居を用意し、紛争を調停し、代理でさまざまな折衝をおこなうなど、公共サービスや社会保障を事実上担ったのはチャイナタウンの同氏同郷団体である。住民の依存度が増すことによってこうした団体は、コミュニティ内での権威と権限を強めていった。

しかし、1943年からすぐに中国系の社会環境が好転したわけではない。1943年の排華法撤廃は、アメリカが中国と対日同盟国となったことで実現したため国際政治戦略の意味が強く、中国人の入国の自由を第一目的に整えていなかった。このため中国人のアメリカ上陸は、依然として巧みに制限された。例えば1943年の後も家族の移民枠が新設されることはなく、さらには1924年の「外国人移民制限法」で定められた国別年間入国数割当が有効であったため、中国人受入枠は、年間わずか105人であった。その一方中国大陸では、大戦後の国共内戦の全面戦争化、アメリカの中華人民共和国成立不承認、朝鮮戦争への米中の介入など混乱が続き、アメリカの中国系住民が故郷の家族や親族の呼び寄せを切望する状態であった。中国系に晴れてアメリカ移住の門が開いたのは、1924年移民法が改正された1965年である。アメリカは1965年の改正移民法で、中国からの移民数を制限していた年間入国数を2万人に引き上げ、アメリカ市民権を持つ者の親族を別枠で受け入れる家族優先制度を設けた。次いで1979年帰化法で、中国からの年間移民受入数を、さらに約2倍に引きあげた [Lai 2004: 20-21]。

このように見てくると、アメリカでは、中国との条約改正とアメリカ連邦政府の法改正の繰り返しの中で合法的な中国人入国制限の仕組みが発展的に整えられてゆき、その社会的影響はじつに1960年代半ばまで残っていたと確認できる。特に1943年から1960年代半ばまでは、入国する側の要求の高まりに対して入国させる側の措置は著しくバランスを欠き、その結果、中国から多くの人々が非合法を含むさまざまな手段でアメリカ上陸を試みた時代となった。入国や現地生活を助ける華人団体の役割は依然として不可欠であり、従ってその権力も保たれた。チャイナタウン内部の権力構造もまた、1960年代まで大きな変化を経験することがなかったのである。

この1960年代までの間に、チャイナタウン内部の動きで注目すべきは、「中華会館」の権威の確立である。中華会館は、現地華人の地縁血縁の相互扶助団体が複数集合した統括体である。南北アメリカの比較的規模の大きな中国人コミュニティに1880年代から90年代にかけて設立

されて現在に至り、サンフランシスコでは「中華総会館」、ビクトリアでは「中華会館」、ニューヨークでは「中華公所」など呼称に若干差異がある。概してその地のチャイナタウン自治の最上格組織であり、中国で政権や政体の入れ替わるなか、アメリカと良好な関係にある政権と結びついた。特に示唆的であるのは、国民党と築きあげた密接な関係である。例えば、サンフランシスコの中華総会館は蒋介石が政権を握った1927年にはやくも国民党支持を表明し、中国在外公館との関係を強化した。1949年に中華人民共和国が成立し国民党が台湾に逃れると、中華総会館は台湾国民党政府を支持した。このため毛沢東の共産党政権を支持したチャイナタウンの労働組合系の諸団体とのあいだで、コミュニティを二分する確執が生まれた。チャイナタウンの管理と支配の権限を維持するために中華総会館は、反共体制をとる台湾との提携を強化して資金援助を受けつつ、1950年代にマッカーシズムの渦中にあったアメリカの政治環境をも巧みに使って、アメリカ政府からコミュニティ管理の統括体としての認知を取り付けた。このようにして中華会館は、中国共産党に対峙するアメリカと台湾国民党政府の外交関係を、コミュニティ政治への影響力確保の基礎にしたのである。国民党との関係を背景にアメリカの中国系コミュニティの最上格組織そして代表者の地位を保ち、少数の商業関係者が執行部を独占して実権を握り、アメリカ政府との連絡役を担った。

台湾国民党政府とアメリカとの二国間関係と一蓮托生であった中華会館の影響力は、1970年代にアメリカと中華人民共和国の国交正常化によって米中関係が好転すると、弱まりはじめた。そして1973年のニクソン訪中を契機に、1978年にアメリカが中国を承認し、台湾政府を否認すると、中華会館は権威の拠所を失った。次いで1965年改正移民法をきっかけに、アメリカ各地のチャイナタウンに中国から大量の新移民が流入して、親中国派に属する新設の華人団体が急増すると、親台湾派の中華会館の力はさらに弱まっていった [Lin 1998: 125-126]。

この時期の特徴的事項として、同化の実態についてもここで言及しておくべきであろう。ゲッター化していたチャイナタウンの住民は、英語力をつけぬまま広東語を話し、読んだ。北アメリカの中国人移民の現地化も現地適応も、そもそも時間軸に正比例して進んだわけではない。現地の「同化」は、本国中国との政治的・経済的・文化的なつながりともども、国際政治力学における米中関係や中国国内の政権交代、アメリカの移民政策の転換など、むしろ政治イベントに左右された。同化や現地適応を時間とともに進んだ不可避現象と安易に受け取る前に、一歩慎重に考察すべき点である。

III 1960年代前後の北米華僑・華人研究——チャイナタウンの移民知識人と北米人研究者

「アメリカ華僑史」や「カナダ華僑史」など北アメリカの国家を単位に書かれた中国系の歴

史研究は、1960年代前半——コミュニティ外では中国人排斥の影響が残り、内ではコミュニティでの中華会館の権力体勢が緩み始めるこの時期から、チャイナタウンのなかで執筆されはじめた。これらは、北米の中国人コミュニティに残る中国語史料や台湾で出版された中国語二次文献を主に用いて、中国語で著されており、明らかにコミュニティ内部の中国系住民を想定読者とするものであった〔李 1967; 劉 1976; 1981; 1984〕。執筆者は中国で歴史学の高等専門訓練を受け、1950年代ごろに中国から移民してきた中国人知識人であり、チャイナタウンで頭脳労働に携わるコミュニティの名望家でもあった。こうした人々は中華会館のメンバーでもあったため、コミュニティ内部に残されている会館史料にアクセスできる利点を持ち、北米現地の中国語資料の保存・編纂と研究をおこなった。ここで用いられた台湾の二次文献とは、台湾国民党政府が僑務の一環として1950年代に出版した一連の刊行物で、具体的には南北アメリカ各国の華人コミュニティの歴史や社会・文化教育、統計、ディレクトリなどである〔陳 1950; 高 1956; 僑務二十五年編集委員会 1957; 湯 1954; 余 1954; 周 1954〕。つまり北米の華僑・華人史研究は、北アメリカ現地の研究教育機関からではなく、中国系コミュニティに入った中国移民知識人から生まれた。中国語史料に対する言語バリアを持たない移民一世の彼らが、チャイナタウン内部で使える文献を、史料引用を重視する中国の歴史学アプローチを用いながら著したものであった。

好例は、カナダ太平洋岸ブリティッシュ・コロンビア州ビクトリアの李東海 David T. H. Lee であろう。広東省台山県生まれの李東海は、北米で就労経験がある中国人労働者の家系の4代目であり、厦門大学歴史学部で史学の訓練を受けた後、1950年代後半にカナダに渡った。渡加してすぐビクトリアのチャイナタウンの歴史に興味を持つと、華僑新聞『僑声日報』やビクトリア華僑公立学校での業務のなかでビクトリア中華会館の秘書を兼任しながら、中華会館内部に残されている史料を整理し、研究した。その後、研究成果と会館史料の数点¹⁾を、まず自らの所属する華僑学校と中華会館の創立記念特別号に掲載して、現地コミュニティ内部で発表し〔李 1960〕、やがてこの作業にカナダ政府の英語史料や二次文献をも使って、初の包括的なカナダ華僑史『加拿大華僑史』を上梓した〔李 1967〕。李東海はこの英語版の出版にも意欲があり、カナダ人研究者に英文原稿を預けて出版を打診したが、当時は叶わぬ夢であった。²⁾自身のアプローチは挫折したものの、その著作は後に北アメリカ人研究者が編集したカナダ華僑史研究書のなかで、最も頼りとされる文献になって、英語媒体に反映されている〔Con et al. 1982〕。

さらに、1960年代に北米人の手によって進んだ華人団体の研究の陰に、李東海の存在があ

1) 李東海が整頓した原資料や手稿は現在、CCBA Fonds, AR030, Box1, File4.3, University of Victoria Archives and Special Collections のなかに確認することができる。

2) “Willmott's Fieldnote,” April 14, 1961. Charles Sedgwick Fonds (1970–1973), AR113, University of Victoria Archives and Special Collections.

ったことも、華僑・華人研究初期において目配りすべき事実である。スタンフォード・レイマン Stanford Lyman とウィリアム・ウィルモット William Willmott はアメリカとカナダの西海岸中国移民史の第一人者として1960年代に北米華僑の組織や団体の研究を進めた研究者であるが、興味深いことに両者はブリティッシュ・コロンビア大学で教鞭をとっていたころ、ビクトリアのチャイナタウンに通って李東海と中国語で意見交換をし、コミュニティ構造を細かく調べている。1961年4-5月のウィルモットのフィールドノートに拠れば、こうした北米の研究者は自ら中国語文献史料を精読するのではなく、李東海から中国語で聞き取りをし、これによって飛躍的にコミュニティへの理解を深めている。³⁾ 二人が聞き得た内容は、公所と同郷会館などコミュニティ構造に関する基本情報をはじめ、中華会館創設の背景や20世紀初頭の保皇党と致公堂の抗争など、史料に基づいた正確なコミュニティ史や、さらには共産党支持の若年層と親台湾である老年層、同氏団体が中華会館よりも政治力も経済力も結束も強い事実など、外部の人間にアクセスの難しい情報にまで及ぶ。また李東海の同伴で、チャイナタウン各所や複数の華人団体の内部を見学して見解を広げ、その結果、「カナダの華人はビクトリアの中華会館を基点に緩やかに連結している」「コミュニティの内部抗争は本国に端を発する性質」などの知見を得ている。自覚的な移民知識人の研究成果や協力は、このように、同時代の北アメリカ人研究者の北米華僑研究にも影響を及ぼした。

なお、アメリカではカリフォルニア州サンフランシスコの劉伯驥が、北米華僑史の発展に貢献している。劉伯驥は広東省台山に生まれ、渡米後は華僑新聞『金山国民日報』の編集長となって反共思想を喧伝し、1980年代には国民党中央評議員を務めた。1976年には台湾の僑務委員会の要請で、初のアメリカ合衆国華僑史を出版し〔劉 1976〕、その後の台湾政府の意向を受けてアメリカ華僑史研究を数々出版した〔劉 1957; 1982; 1984〕。研究が粗く思想的偏りがあるため、歴史家としての技能は必ずしも高くないが、会館史料を転写引用した箇所が多く、現在紛失しているそれら多くの史料を読むことができるので、編集上の功績は大きい。

李東海や劉伯驥のような移民知識人に共通して見られる研究動機は、現地で華人排斥法の影響で寂れたチャイナタウンの現状を直視して危機感を抱き、なんらかの文化事業を仕掛けてその再活性化をめざそうというものである。移民先コミュニティで本国知識人の自覚とともに着手した華僑史の執筆は、その一環とすることができるだろう。しかし閉鎖的で自己完結したチャイナタウンのなかで中国系の研究を進めると、却って中国人でありかつ知識人である自己を、華人排斥法下の北米現地の文脈からでは肯定的に解釈し難く、自己肯定の理由を常に模索せざるを得なかった。特に注目すべきは華僑の「同化」に対する言説であり、こうした移民知識人の華僑論は、次のように多くのねじれを内包している。「中華文化は偉大であり我国五千年の

3) "Willmott's Fieldnote," April 14 and May 29, 1961. Charles Sedgwick Fonds (1970-1973), AR113, University of Victoria Archives and Special Collections.

建国の基礎であり、その学術・倫理・社会は世界の先駆けであった。身は海外にあり生活習慣は祖国と異なるのだが、我々は畢竟中国人なのだと知るべきである」[李 1967: 470-471] とあるように、李東海のこの言説は、溯っては1923年に在ニューヨーク中国領事館員が論じた、中国人の「同化」に対する意見と相通じる。「私にとって所謂『同化』とは、華僑がアメリカ人になってしまうことではない。アメリカ人は黄色人種を輕蔑して我々に国籍を与えず、却って法で我々を排除しているのだ、なにゆえアメリカ籍市民に同化できよう。私の言う同化とは、文明を倣い、教化を習い、共和国の国民を養成することだ」[屠 1923: 39] との北米華人像には、自己同定にあたって特定の国家を拠所にすることができない現状のために、文明や教化など形而上のものを引用せざるを得ない、当時の華僑アイデンティティを端的に表している。この視座は、台湾の国民党政府が展開する僑務政策と結びつき、その「華僑・華人」概念を反映した。成立時のこのような限定的性格を見ると、中国系移民を対象とする研究が、アイビーリーグ校を含む北米の一流校で書かれる博士論文で人気のテーマとなったことは、隔世の感があると言えるだろう。

IV アジア系アメリカ人運動とコミュニティ権力の解体——「アジア系アメリカ人研究」の設立

1970年代、米中関係の変化以上にチャイナタウンの構造に変化を迫り、中華会館に権力解体の楔を打ち込んだのが、「アジア系アメリカ人運動 The Asian-American movement」である。歴史家マー＝アーメントローは、辛亥革命期にアメリカのチャイナタウンで革命に共鳴した現地華人とそのコミュニティを研究し、このときチャイナタウンが高度に政治化し、初めて国外の華人が中国の国内政治に積極的態度を向けるようになったと捉えた。ここでは20世紀初頭を、チャイナタウンのコミュニティ史上、その社会構造と社会秩序を変えるほどの政治的社会的転換が起こった重要な時期と見做しているのだが、興味深いことに、「公民権獲得運動がコミュニティを巻き込み、東アジアから新しい移民が始まった時期」に匹敵する一大変動期でもあると言及されている [Ma-Armentrout 1990: 1]。これは具体的には、1960年代の黒人公民権運動の影響を受けてアジア系アメリカ人運動が始まり、1965年改正移民法と1979年帰化法を受けて後、アジアからアメリカへのマスイミグレーションが起こる時期、すなわち1970-80年代を指す。アメリカの1970-80年代は、エスニシティへの理解と関心が深まってさまざまな改革運動が実践され、「アジア系」はまさに当時のアメリカ全体を覆う社会的関心の一部であった。そして、この流れを受けて成立した学問が「アジア系アメリカ人研究 Asian-American studies (AAS)」である。エスニック・スタディーズの一科目として発展したこの研究領域で中国系の人々を対象とする研究がおこなわれており、これは、疑いなく北米華僑・

華人史研究のひとつのかたちとして、その議論の特徴には注意を払う必要がある。

アジア系アメリカ人運動は、アジアにルーツを持つ人々がアメリカの民主主義の立場から人種間平等と社会的公平、そして政治エンパワーメントをめざして、公民権運動とベトナム反戦運動の流れをくんで1960年末から発展させていった改革運動である。1970年代に本格化したこの運動は急進的な公民権運動と異なり、活動内容や要求には政治よりもむしろ社会的・文化教育の傾向が強く、アメリカの運動としては比較的穏健である。運動というよりはむしろ、ひとつの社会潮流とも表現できよう。アメリカの多民族社会におけるアジア系の肯定的なあり方を確立するために、日本や中国、フィリピンなど出身国ごとに細分化されることのない、新しい汎アジア的な文化共同体意識とその新文化の構築が目指され、現在使われている「アジア系アメリカ人 Asian American」という集団概念は、この運動で意識的に創出されたものである [Wei 1993; Lin 1998]。

運動のなかの幾つかの活動のうち、アジア系コミュニティ内部の社会問題への取り組みは、最重要事項であった。例えば後でも触れるが、大学における「アジア系アメリカ人研究」課程新設をめぐるのは、コミュニティの実態を知りその社会問題解決に取り組んでいけるよう、学術とコミュニティと相互のかかわりを維持することがひとつの設置理念となっていた。つまり当初は高等教育機関とコミュニティの双方で、アジア系アメリカ人研究のプログラムを実施することで、アジア系の歴史や現況・社会問題への理解を深めて解決に結びつける、実践型学問をめざす方向性が意識されていた [Wei 1993: 132-138]。なかでも中国系は、北米のアジア系住民のなかで最大規模のエスニック・コミュニティであるチャイナタウンの社会問題を強く認識していた。中国からの大量の新移民がサンフランシスコやニューヨーク都市部の古いチャイナタウンに流入し、爆発的な人口増加によって急成長した後は、さまざまな社会問題が深刻化していた。もともと貧困問題や劣悪な住宅環境の問題が慢性的であったが、1980年代からは貸借料の高騰・高い疾病率・麻薬売買・マフィアの活動・精神医療問題など、大都市の低所得コミュニティ特有の問題が累積した。

チャイナタウンのコミュニティ問題に直面して、アジア系アメリカ人運動に関わる知識人たちは地域密着型の新団体を作ると、その団体の社会福祉機関を通して職業訓練や教育機会など住居・医療・雇用・教育面のサービスをコミュニティの中国系住民に提供し、社会・保健・司法サービスを整えた。しかし、これは中華会館傘下の氏族団体や同郷会館組織がおこなってきた仲介業務とクライアント獲得において競合した。また新団体は、中華会館が担っていた就職斡旋・資金の貸し付け・紛争調停機能に住民が依存しなくていいよう、コミュニティ外部から資金助成を得てコミュニティ改善運動を展開したため、これが同様の軋轢を生み出した。さらに、チャイナタウンが自己完結した政治や経済を持つ閉鎖的なコミュニティである限り問題解決は困難だと考えた新団体は、中国系が、他のアジア系と提携できるよう「アジア系アメリカ

人」「中国系アメリカ人」という汎アジアのアイデンティティを全面に押し立てて、アメリカの市・州・連邦政府や民間団体と交流し、閉鎖的なコミュニティが外に向かって開くように、さまざまな改善活動を試みた。新団体のこうした方法は、中華会館が歴史的に築いてきた権力構造を解体する方向にあり、中華会館の既得権益と正面から衝突するかたちとなった。社会問題の解決にむけて採る政治アプローチの違いや、相互の行動原理の違いも、両者の溝をさらに深める一因となっていった [Kwong 1987; Wei 1993: 172-173; Lin 1998]。

以上の経過に明らかなように、1970年代には北米華僑・華人研究の知の担い手とコミュニティとの関わり方に、大きな変化が表れている。国内の急激な社会変化を受けて、知識人としての拠り所は必ずしも中華会館のメンバーシップに左右されず、却って対立するなどの状況が見出せる。高等教育を受けた二世や三世、香港や台湾を主とする移民知識人など、中流階級出身で米中二つの言語と文化で育った中国系の運動家や学生は、アメリカの社会運動に直接身を投じることで知識人の役割を自覚的に担ったのである。この時期に北アメリカの中国系の研究に直接関わり飛躍発展させたのは、アジア系アメリカ人運動に組みする一群の知識人である。こうした研究者による研究は、1960年代にコミュニティの内部から立ち上がった実証中心の中国語の歴史研究とは対照的に、英語文献を豊富に用い、先行研究の実証を新パラダイムに従ってナラティブの組み替えを進めるもので、それまでの華僑・華人研究とは、むしろ断絶した知のフィールドになっていった。

大学におけるアジア系アメリカ人研究の講座設置は、学生運動家の要求の結果、1968年にサンフランシスコ州立大学とカリフォルニア大学バークリー校の両校のエスニック・スタディーズ学部の一専攻となったものが嚆矢である。以来、新領域であるアジア系アメリカ人研究を大学の履修課程に設ける大学数が増え、専門家が教鞭を取り、専門の学位を出す大学の教育プログラムとして整備が進んだ。東海岸でも、1972年にニューヨーク市立大学で1,000人以上のアジア系学生がアフリカ系やヒスパニック系と連合して同大学の事務棟を13日間占拠したとき、中国系の参加学生闘士団体がチャイナタウンの無職の若者への特別教育、ならびにアジア系の研究プログラム設置と社会サービスの開始を要求し、この要求に応じてアジア太平洋系アメリカ人研究課程が設置された [Lin 1998: 128; Wei 1993: 132-134]。

アジア系アメリカ人研究はアメリカ社会のなかのアジア系に共通する社会問題を探り、アジア系の人々の自己認識を高めるという明確な目的から出発した学問である。もともと運動の一環でエスニック・コミュニティの社会問題に取り組み、解決に導くため、コミュニティ内部で教育プログラムを組むことと並行して大学に専門課程が設けられたことは、前述の通りである。このため本質的に目的意識が強い。具体的にはアジア系のアイデンティティや表象、歴史など全般を研究対象にしており、現在この領域で大量の学位論文が書かれ、アメリカで最も勢いある学問領域のひとつである。文献による実証を重視する歴史学アプローチからみれば、粗く主

観的ともとれる研究が多い。殊に「同化 assimilation」への視座は特徴的である。現地社会への同化は、一世、二世、三世と移民が世代交代するなかで必然的かつ不可逆的に進行するのが常識と認識される。実際に、移民の一家族を時系列にたどる場合、あるいはある世代を横軸に分析する場合、現地言語の運用の程度や就いた職業の社会的位置・現地文化の受容の程度、そして客観的基準としては扱いづらいがアイデンティティの所在など、相応の根拠を用いて「同化」を証明する。アジア系アメリカ人研究には、こうしたアメリカの社会通念を反映して、同化を自明のものに捉える傾向が強いが、さらにこれに加えてアメリカを中心に据え、そのなかからアジア系の人々を肯定的に位置付け直す視座がある。これが殊更同化を前提とした議論を導いている。この分野の入門書の中には、ビジネスや学術でのアジア系の優秀さを強調し、自己肯定意識の高揚を狙う表現も少なくない [Fong 1998]。

アジア系アメリカ人の概念を用いた歴史研究に注目してみると、日系の研究者を中心に1980年代に数多く出版されていた [Daniels 1988; Ichioka 1988; Takaki 1983; 1989]。「アジア系アメリカ人研究」の学問創設を第一目的とする書籍に比べて、歴史研究の場合、同化やアジア系肯定への言説がはるかに穏やかである一方で、文化多元主義のアメリカを彩る市民としてアメリカの政治や社会に能動的に関わってゆく姿勢が強く意識されている。これまで各国出身のアジア系移民の歴史を縦割りて捉えてきた移民研究の枠組みを横に広げ、日本、中国、インド、韓国、東南アジア諸国から移民したアジア系の人々の歴史を並列して描き、アメリカ史の文脈で位置付け直してゆくというナラティブに特徴がある。アジア系の人々が「アメリカ市民」となってゆく、現地社会への順応と適応のプロセスが描かれ、社会同化を不可逆的なものとして捉えながら、その過程での困難やそれに立ち向かう姿、乗り越える過程、闘争、反応に力点を置く。社会におけるアジア系のプレゼンス確立を目的とする運動を、学問が受けるというアメリカの土壌のなかで、この研究領域には「同化」に対するアメリカのアジア系自身の位置付けが強く投影されているのである。

この文脈で中国系を専門に扱う研究も多く、チャイナタウンの秩序構造や教育、公共衛生などコミュニティ問題と、それに主体的に関って社会に適応しアメリカ市民として発言してゆく中国系の姿を時系列に迫るアプローチが特徴的である [Loo 1998; Shah 2001; Yung 1995]。この時期の中国系移民プロパーの歴史研究にもコミュニティ研究が多いが、包括的なコミュニティ分析よりも衛生や教育などテーマ性が高い。これは、学術とコミュニティ社会との目的の近さに由来したと換言できる。1925年にサンフランシスコのチャイナタウンで生まれ、西海岸でアメリカの中国系移民研究を長く担ってきた広東省南海県原籍の歴史家ヒム・マック・ライ (Him Mark Lai 麦礼謙) は、早くから中国系の現地適応を「華僑から華人へ」という文脈のなかで捉えてきた。ライの歴史学の手法はオーソドックスで堅実なものであるが、アメリカ人としての中国系を強く意識する新しさゆえに、アジア系アメリカ人研究の流派に受け入れら

れる研究者の中でも最年長組として、この時期から現在まで、西海岸の中国系知識人の中国移民史研究の指導的立場にいる [Lai 1977; 2004; 麦 1992]。

またこの時期に運動の影響を受けて整備が進み、華僑・華人研究の枠組みが発展する一側面として、資料館の設立や、史料案内や研究入門などのレファレンス編集も取り上げるべきであろう。ニューヨークの「南北アメリカ華人博物館 (Museum of Chinese in the Americas 美洲華人博物館)」やサンフランシスコの「アメリカ華人歴史協会 (Chinese Historical Society of America 美国華人歴史学会)」は南北アメリカの中国移民や中国系アメリカ人をテーマとする専門的な特別博物館であるが、もともと歴史と生活を可視的に紹介して中国系アメリカ人のアイデンティティを構築するために、運動家や中国系知識人の主導で設立された。これらは博物館の機能と同時に、中国系移民が所有、作成した資料を収集・保存し、それらを研究者に公開する資料館の役割も果たしている。⁴⁾ この時期に出された充実したレファレンスとしては、前述のサンフランシスコの碩学ライが編集出版した、アメリカ各所に存在する中国移民や中国系が残した中国語史料の情報を盛りこむ北米華人関係資料の解題である [Lai 1986]。また、ドミニカ共和国に生まれ香港で育ち、現在はニューヨークでさまざまな文化振興事業に携わり、東海岸のアジア系アメリカ人運動の拠点だったハンターカレッジに学び、卒業と前後して中南米の華僑・華人に関する充実した二次文献案内を編集している [Leon 1990]。

結にかえて

北アメリカにおける華僑・華人研究の誕生、そして新パラダイムの創設による新たな華僑・華人研究の展開を見てきた結果、この研究領域の発展と変化が、長いあいだ移民知識人や中国系研究者がアメリカの社会的影響を受けて、現地における知識人としての自己を模索し実践する、その動きと同調してきた様相を確認できた。この関連で、自然不可避と捉えられがちな現地社会への「同化」は、連邦政府の制定した法で阻害される、あるいは大きな社会的うねりの中で肯定されるなど、中国系住民に対する国民国家の姿勢を受けて、可変的に語られてきた。こうした実態は、北アメリカを例にして、より理解できるのではないだろうか。特に北米中国系移民の歴史には、ある時点で「中国系」としての自己や集団を肯定できる根拠ができた時、現地への同化を意図的に模索するうごきが認められる。その肯定の根拠には、本国中国と現地社会との国際関係が好転した、本国内政や思想のドラスティックな変化が起こったなどの事情があり、そのなかで国外居住する「華僑」「華人」として能動的な姿を全面的に自己同一化で

4) 各機関のHPは次の通り。

Museum of Chinese in the Americas 美洲華人博物館 <http://www.moca-nyc.org/MoCA/content.asp>;
Chinese Historical Society of America 美国華人歴史学会 <http://www.chsa.org/>

きた時、それが研究にも反映されていった。

現地の現代史の文脈から華僑・華人史研究を対象化してゆくに当たって、当時中国系の知識人やコミュニティに影響を与えていた国家や社会からの要請、本国との関係、コミュニティ内部における政治などの影響が、立体的に認められた。自らの調査フィールドで過去におこなわれてきた研究を、研究成立史という別の視点から見直し、学術研究の背後にあるこうした諸要素を意識することで、事例研究の積み重ねが続くこの領域を今後展開させるきっかけを考えてゆけるのではないだろうか。

文献解題

1. Ronald Takaki. 1989. *Strangers from a Different Shore: A History of Asian Americans*. Boston: Little, Brown.

「アジア系アメリカ人」概念を用いての歴史研究のかたちを知るには最適である。アメリカ近現代史のなかでアジア系に共通する歴史的経験を導き出す目的で、大量の英語二次文献を参照しながら、中国・日本・朝鮮半島・東南アジア諸国から上陸した移民たちの歴史と社会を叙述した労作である。アメリカの文化多元主義を体現する「アメリカ市民」としてのアジア系を描くことに力点が置かれ、現地適応の過程で発言し闘う人々の姿が強く出ている。邦訳本は註や参考文献を大きく省く。

2. Jan Lin. 1998. *Reconstructing Chinatown: Ethnic Enclave, Global Change*. Minneapolis: University of Minnesota Press.

ニューヨークのチャイナタウンを取り上げた著書、論文やレポートは多いが、分析や調査が粗いなど、多くは問題を残している。本書は1870年代後半からのアジア系アメリカ人運動時期のチャイナタウンに関する著書のなかで、もっとも詳細かつ正確に、コミュニティの権力構造の実態と変遷を分析している。なお、西海岸のアジア系アメリカ人運動の全体像や理念などを網羅した優れた入門書には、Wei, William. 1993. *The Asian American Movement*. Philadelphia: Temple University Press がある。

3. Philip A. Kuhn. 1997. *The Homeland: Thinking about the History of Chinese Overseas*. Canberra: The Australian National University.

排華を経験したアメリカならではの視座から中国移民を捉えた、独特の癖のある短編ながらも、中国移民研究において「本国 Homeland」中国をどのように扱うべきか、早い時期にその問題提起をした先駆的論考である。「本国」について、華僑・華人がいずれに

所属あるいは自己同定するかという視点を離れ、移民研究のなかで現地と移民と合わせて必ず勘案すべき主体のひとつであると論じている。

4. Adam McKeown. 1999. Conceptualizing Chinese Diasporas, 1842 to 1979. *The Journal of Asian Studies* 58 (2).

北米中国移民史の領域で、「ディアスポラ」をひとつの概念とすることを提案した論考。研究史では新概念を北アメリカの中国移民の歴史研究の領域に引き込んだ、重要な位置にある。これまでの華僑・華人研究の視座の限界が国民国家に軸をおいたアプローチに由来するものと指摘し、移動性に関わる諸現象から捉えなおした1842-1949年の南北アメリカの中国移民近代史のナラティブを試みた。2000年以降一気に成果が出てきた実証研究の立脚点が、どのように従来の華僑・華人研究と異なるか、その概念を理解できる。

5. Madeline Yuan-yin Hsu. 2000. *Dreaming of Gold, Dreaming of Home: Transnationalism and Migration between the United States and South China, 1882-1943*. Stanford, Calif.: Stanford University Press.

トランスナショナリズム研究で最初の歴史実証研究である。膨大な僑刊や新聞、雑誌など中国語史資料を用いて、20世紀前半の排華法時代に、広東省台山出身の農民がサンフランシスコとの間に形成していたトランスナショナリズムの総体を、送金や生活戦略、家族、商売などの越境する諸事象を研究することで証明した。シュの評価を不動にした「出世作」であり、本書は最新の華僑・華人史研究として広く認知されている。

主要参考文献

英語

- CCBA Fonds, AR030, Box1, File4.3, University of Victoria Archives and Special Collections.
Charles Sedgwick Fonds (1970-1973), AR113, University of Victoria Archives and Special Collections.
Chen, Yong. 2000. *Chinese San Francisco, 1850-1943: A Trans-Pacific Community*. California: Stanford University Press.
Chinn, Thomas W., ed. 1969. *A History of the Chinese in California: A Syllabus*. California: Chinese Historical Society of America.
Con, H.; Con, R.; Johnson, G.; Wickberg, E.; and Willmott, W. 1982. *From China to Canada: A History of the Chinese Communities in Canada*. Minister of Supply and Services Canada.
Daniels, Roger. 1988. *Asian America: Chinese and Japanese in the United States since 1850*. Seattle: University of Washington Press.
Fong, Timothy P. 1998. *The Contemporary Asian American Experience: Beyond the Model Minority*. New Jersey: Prentice Hall, Inc.
Hsu, Madeline Yuan-yin. 1996. "Living Abroad and Faring Well": Migration and Transnationalism in Taishan County, Guangdong 1904-1939. Ph. D. Thesis, Yale University, Department of History.

- . 2000. *Dreaming of Gold, Dreaming of Home: Transnationalism and Migration between the United States and South China, 1882–1943*. California: Stanford University Press.
- Ichioka, Yuji. 1988. *The Issei: The World of the First Generation Japanese Immigrants, 1885–1924*. New York: Free Press.
- Jung, Moon-Ho. 2000. *Coolies and Cane: Race, Labor, and Sugar Production in Louisiana, 1852–1877*. Ph.D. dissertation at Cornell University.
- Kuhn, Philip A. 1997. *The Homeland: Thinking about the History of Chinese Overseas*. Canberra : The Australian National University.
- Kwong, Peter. 1987. *The New Chinatown*. New York: Hill and Wang.
- Lai, Him Mark 麦礼謙. 1986. *A History Reclaimed: An Annotated Bibliography of Chinese Language Materials on the Chinese of America*. Los Angeles: Asian American Studies Center, University of California.
- . 2004. *Becoming Chinese American: A History and Communities and Institutions*. California: AltaMira Press.
- , ed. 1977. *Chinese Newspapers Published in North America, 1854–1975*. Washington D.C.: Center for Chinese Research Materials.
- Leon, Lamgen 梁林興. 1990. *Asians in Latin America and the Caribbean: A Bibliography*. New York: Asian American Center, Queens College City University of New York.
- Lin, Jan. 1998. *Reconstructing Chinatown: Ethnic Enclave, Global Change*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Loo, Chalsa M. 1998. *Chinese America: Mental Health and Quality of Life in the Inner City*. California: SAGE Publications.
- Ma-Armentrout, L. Eve. 1990. *Revolutionaries, Monarchists, and Chinatowns: Chinese Politics in the Americas and the 1911 Revolution*. Honolulu: The University of Hawaii Press.
- McKeown, Adam. 1999. Conceptualizing Chinese Diasporas, 1842 to 1979. *The Journal of Asian Studies* 58(2).
- . 2001. *Chinese Migrant Networks and Cultural Change: Peru, Chicago, Hawaii, 1900–1936*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Shah, Nayan. 2001. *Contagious Divides: Epidemics and Race in San Francisco's Chinatown*. Berkeley: University of California Press.
- Takaki, Ronald. 1983. *Pau Hana: Plantation Life and Labor in Hawaii, 1835–1920*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- . 1989. *Strangers from a Different Shore: A History of Asian Americans*. Boston: Little, Brown.
- (タカキ, R. 1996. 『もう一つのアメリカン・ドリーム——アジア系アメリカ人の挑戦』阿部紀子；石松久幸(訳). 東京：岩波書店.)
- Wei, William. 1993. *The Asian American Movement*. Philadelphia: Temple University Press.
- Wickberg, Edger. 2002. Overseas Chinese: The State of the Field. In *Chinese America: History and Perspectives*. 16. (初出は Wickberg, Edger. 2000. “Overseas Chinese: The State of the Field.” The paper prepared for the Regional China Colloquium, Simon Fraser University.)
- Wong, Bernard P. 1988. *Patronage, Brokerage, Entrepreneurship, and the Chinese Community of New York*. New York: AMS Press.
- Yung, Judy. 1995. *Unbounded Feet: A Social History of Chinese Women in San Francisco*. Berkeley: University of California Press.

中国語・日本語

- 陳匡民. 1950. 『美州華僑通鑑』 New York: 紐約美州華僑文化社.
- 高德根. 1956. 『秘魯華僑史話』台北：海外文庫出版社.
- 胡垣坤(主編). 1997. 『カミング・マン——19世紀アメリカの政治風刺漫画のなかの中国人』村田雄二郎；貴堂嘉之(訳). 東京：平凡社.
- 李東海. 1967. 『加拿大華僑史』Vancouver: 加拿大自由出版社.
- 李東海(主編). 1960. 『加拿大域多利中華會館成立七十五周年華僑學校成立六十周年記念特刊』

- Victoria: 加拿大域多利中華会館・域多利華僑学校.
- 劉伯驥. 1957. 『美国華僑教育』 台北：海外出版社.
- . 1976. 『美国華僑史』 台北：行政院僑務委員会.
- . 1981. 『美国華僑史（続編）』 台北：黎明文化事業公司.
- . 1984. 『美国華僑逸史』 台北：黎明文化事業公司.
- 麦礼謙. 1992. 『從華僑到華人——二十世紀美国華人社会發展史』 香港：三聯書院.
- 僑務二十五年編集委員会（編）. 1957. 『僑務二十五年』 台北：海外出版社.
- 湯成錦. 1954. 『智利華僑史話』 台北：海外文庫出版社.
- 屠汝涑. 1923. 『旅美華僑実録』 New York: n.p.
- 余受之. 1954. 『墨西哥華僑史話』 台北：海外文庫出版社.
- 周彤華. 1954. 『檀香山華僑史話』 台北：海外文庫出版社.